

張文環小説における青年知識人像の設定

－その出身背景をめぐり－

北見吉弘*

摘 要

張文環の小説において主に男性主人公として登場する青年知識人像は学校教育を受け、高学歴取得を価値観に置くという共通性を有する。ただし、当時一般の学歴や資格取得を手段に立身出世を願う知識人とは異なる存在であり、主に儒教道徳や人道主義を重んずる伝統的知識人として描かれ、当時の近代化の進んだ台湾においては極めて特殊な人物像となっている。

今回は、関連する人物像の家庭環境や人間関係の分析を通じ、それら青年知識人像が特殊性を備えるに至った要因を提示したものである。

キーワード：張文環、台湾文学、知識人、学歴、小説

*育達商業科技大学応用日本語学科助理教授



在張文環小說中對於青年知識份子形象的設定

—關於他們的出身背景—

北見吉弘*

摘要

在張文環的小說中，以主角身分出現的青年知識份子們，其共通性是具有受教育、取得高學歷的價值觀。然而，和當時以取得一般的學歷和資格為手段，希望出人頭地的知識份子不同，這些青年知識份子被描寫成重視儒家道德和人道主義的傳統知識分子，在當時已經相當近代化的台灣社會中，是相當特殊的人物形象。

這次透過分析相關人物的家庭背景和人際關係，以究明造成那些青年知識份子形象特殊性的原因。

關鍵詞：張文環、台灣文學、知識份子、學歷、小說

*育達商業科技大學應用日語系助理教授



Setting of the Young Intellectuals in Zhang Wenhuan' s Novel Works About the Background They Belongs

Yoshihiro Kitami*

Abstract

The common point that young intellectuals who appeared as a chief character in novel works by Zhang Wenhuan, mainly receive school education and to make much of the acquisition with high educational background. They are not people achieving success in life with educational background and qualification as means. Mainly they are traditional intellectuals and make much of Confucianism morality and humanitarianism, and this kinds of people are very special in those days when modernization went ahead through in Taiwan.

This article analyzed the background of birth and the breeding and the human relations that all characters who appeared in the story, then through it investigated a factor with specialty of those characters.

Keywords : Zhang Wenhuan , Taiwanese literature , intellectual , educational background , novel

* Assistant Professor, Department of Japanese, Yu-Da University



1. 序

張文環の小説作品に於いて主人公として多く登場する男性人物で最も多い人物像が学問に志し学校教育に価値観を示す青年知識人である。これら人物は公学校就学に始まり、最終的には日本留学を通じた大学卒業の高学歴を有するのであるが、そのほとんどが立身出世とは無縁な学問であった文学・哲学などの人文科学専攻という人物設定となっている。ちなみに、張文環の小説が背景とする戦前から戦後間もない頃の近代化に伴う発展途上にあつた台湾社会では、一般的な高学歴取得における専攻としては自然科学や社会科学の分野が尊重され、文学、哲学などの人文科学は新時代の趨勢に不相応であったことから、それら作者の作品における青年知識人像は、当時の高学歴取得の知識人一般とは思想性や生き方がかけ離れた人物として描かれ、かなり特殊な性格付けがなされたものであつた。

この種の人物像造形に現れた特殊性に関しては、筆者の先行研究「張文環小説におけるインテリ人物の特殊性」¹で論述済みであり、張文環が自身の分身として登場させた「落蕾」義山、明仲、「山茶花」賢、「地方生活」澤などの青年知識人像には、俗世間で尊ばれた医学や法学専攻に見られる功利主義的、個人主義的な価値観を重んじる知識人一般の生き方に対する作者の批判的な考えがあつたものと考えられるのであるが、その具体的様子に関しては先に挙げた先行研究に於いて論述済みである。主には張文環の青年知識人像は、当時の台湾に於ける知識人一般が重視する立身出世を至上とする考えを持たず、あくまでも個人的利害を否定した上での人道的、道徳的な生き方を貫く態度を示しているというのが要点であるが、換言すれば、張文環は自身の分身であるそれら青年知識人像を通じ、近代的、俗世間的な価値観に惑わされない真の人間のありかた、いわば伝統的、道徳観、人道主義的な生き方が貫ける伝統的知識人の姿を示したものと思われるのである。即ち、当時の社会における教育観念に対する問題意識が、作者張文環をして極めて特殊な知識人像造詣を施させたということが考えられるのである。

¹ 北見吉弘、「張文環小説におけるインテリ人物の特殊性」、『育達人文社会学報』第八期、苗栗、2012. 7.



ただし、筆者の先行研究では、そこに示されたのが青年知識人像が当時の知識人一般とは異なる特殊な存在として、その思想面を主とする内面性のありかたの提示に留まるものに過ぎないことが拒めない。張文環の青年知識人像に対する全体像としての更なる把握や理解には、やはり単に人物像の特殊な思想性、性格面などの内面性のみでの提示に留まらず、更にそれら男性人物が道徳的、人道的な思想性や価値観を至上とするに至った家庭環境や社会環境、そして人物像をめぐる家庭内の人間関係などの外的要因を探る必要があるのではないかとと思われるのである。

以上の理由により、今回は人物像の出身家庭の様子や人間関係など、人物像の特殊な思想性形成をもたらしたその出生や成長における背景を探った次第である。

2. 青年知識人像の描かれた作品に関して

以下は関連する青年知識人像が登場する作品リスト①（発表年月順）である。作品の選出に於いては、主要人物（成年知識人像）が学校教育を受け、それも大学などの高学歴を有すること、或いは相応の高学歴取得に価値観を示す人物（学校教育を受ける前の少年像は除く）であることを必須条件とした。尚、リスト①に挙げた「頓悟」為徳に関しては、唯一、公学校卒業を最終学歴としている人物であるが、この場合、性格や思想性及び教育に対する見解がリストにある他の多くの青年知識人像と共通していること、同時に作者の分身的な意味で作者の個人的な思想性や教育観を表していることなどの理由により、以下のリストに加えることにした。更に、今回の研究に関連し、主要人物の多くが知識人として描かれた設定には、その家長たる父親の存在や家庭経済の支えとなる家業のあり方等が重要な要素として関与していることから、それら二項目も同時にリスト中に示すことにした。

リスト①：主に大学就業、卒業における人物に関して
作品（発表年月）



■主要人物（家庭における位置づけ）、作品内容に於ける最終学歴

▲父親像 ●家業

「落蕾」(1933. 7. 15)

■「明仲」(一人息子)、大学在学中 ▲— ●—

「父の要求」(1935. 9. 24)

■「陳有義」(不明)、大学在学中 ▲「父」 ●—

「頓悟」(1942. 3. 30)

■「為徳」(不明)、公学校卒業² ▲「父」 ●「精米所」経営³

「山茶花」(新聞連載小説、1～111回、1940. 1. 23～1940. 5. 14)

■「賢」(一人息子)、大学在学中 ▲「楊徳義」

●山産物の「店」経営

「山茶花」(新聞連載小説、1～111回、1940. 1. 23～1940. 5. 14)

■「劉万徳」(長男)、中学卒業以上⁴

▲「劉水深」 ●「茂昌商店」経営

「地方生活」(1942. 10. 19)

■「澤」(一人息子)、大学卒業 ▲王主定

●「商店」経営

「土の匂ひ」(1944. 7. 1)

■「輝清」(一人息子)⁵、大学卒業 ▲「父」

●「父」が「精米工場」の「株主」、同工場「帳簿」担当⁶

²作品には主人公為徳の発言である「自分の如き中學さへ行かれぬもの」、そして為徳の勤務する呉服店の主人の発言である「為徳君、私は君が勉強家であることはよく知つてゐる。君が上の學校へ行きたがつてゐる」(「頓悟」、同注 28、p. 221) が見られる。

³作品にある「父は田舎の友人に勧められて、都會でくすぶるよりも田舎で發展した方がいゝと云はれたので、臺北の家をたゞんで田舎で、少しばかりの地所を買ひ、精米所に勤めてゐたが、やつぱり家運は思ふ通りに行かなかつた」(「頓悟」、同注 28、p. 225) との記載から判断した。

⁴作品には「R 中学」(「山茶花」、同注 11、p. 161) に在学していたこと、そして、その後、法学専攻の学生となったこと(ただし高校や大学などの提示は無い) が示されるのみである。

⁵「姉のうへにもう一人の男の子がゐたが、二つのときに亡くなった」とある如く、既に「姉弟二人きり」(「土の匂ひ」、同注 15、p. 12) となっている。

⁶作品には「父は精米工場に株があるので、そこの帳場をうけもつてゐたために、辛うじて毎日の生活を保つてゐると云ふ状態だつた。」(「土の匂ひ」、同注 15、p. 10) との記載がある。



実際、青年知識人に属するか否かに関わらず、作者がその小説作品に描いた台湾人青年達の出身家庭の大半は、その家族構成の中心が父親と息子の二人に限定されている傾向が見られる。即ち、家長たる父親像と、そして跡取りたる中心人物（主に長男或いは一人息子の登場）の設定が基本となった上で、旧世代の人物が父親側、新世代の人物が息子側になった、いわゆる親子二世帯に特定されたものが殆どであり、それ以外の人物、例えば祖父母や孫に相当する人物の登場は殆ど無いに近い。また、多く「母」として登場する人物も大まか見られるものの、それら「母」たる人物に対しては一律固有名詞が用いられず、かつ人物描写に於ける深みも見られず、さほど重要な役割を担っていないのが明らかである。更に、子供側に於いては、男性人物でなく女性人物を中心とする家庭、例えば、「落蕾」秀英、「頓悟」阿蘭、「山茶花」娟や輝、「地方生活」淑の如く、新女性側を中心とした家族設定もあるが、量的にはかなり少なく限られている。

要するに、張文環がその小説創作に於いて意識した主な家庭設定で言えることは、まず第一点として、その人物設定において主に父親像と跡継ぎ息子との関係を念頭に置いた傾向が強いことが挙げられ、少なからず作者が旧時代に於ける男尊社会の家族構成を意識したものと思われる。また、中には「父の要求」陳有義、「頓悟」為徳などは作品中における家族構成が明らかでなく、その家族構成をめぐる両親たる「父」、「母」以外の存在がまったく示されていない例もあるが、いずれにせよ主要人物の将来性や前途多難な様子が作品中に明確に示されていることから、これら作品に於いても作者が父親と一人の息子との人間関係をある程度意識していたものと言える。

続いて、第二点の特徴としてはそれら後取り息子を有する家庭が多くが商店経営主や工場経営主となり、小、中の資産家に設定されていることである。即ちそれら人物が長男や一人息子としての設定に関連し、これら人物の将来的発展には家業を継承すべき後継者としての可能性が大いに存在していたと考えられるのである。更に、リスト①の主要人物に於いては、「山茶花」劉万徳を除き、全てが主人公としての登場であり、同時に作者の人生経験を題材に造詣された分身となり、作者の個人的な主観性や思想性を多分に共有



し、更に商店経営などに価値観を示さない人物として描かれていることが注目される。

3. 青年知識人像の出身家庭

3.1 家庭状況

まず、それら主要人物が主に商店経営者の家庭、或いは少数ながら工場経営者の家庭に於ける長男、或いは一人息子として設定されているからには、事実上、彼らが稼業を引き継ぐ跡取り息子としての役割をも担うべく存在であったことが想像される。ただし、それら人物の家庭経済基盤は無産階級の庶民のものに比べれば表面的には資産家としての面目は残しているが、多くがそれほど裕福ではない中流階級や小資産階級に属し、世襲貴族の如く豊潤な財産を以って代々家系を維持するまでの高水準には至っていない。リストに挙げた最初の二作品「落蕾」、「父の要求」では、作品内容に於ける人物像の家系維持の根源たる家業の紹介がなく、作者はそれら家庭内部における逼迫した経済状況を示すだけであるが、ただし、「落蕾」明仲の場合、彼の公学校時代からの友人で家が貧乏な義山から見れば「金持ちの一人息子」⁷に映る存在となっており、無産階級には属さないことは明らかである。明仲自身もそのことを自覚しており、「如何にも僕は留學生だ、君は百姓と労働をやらされてある、世の中では君と僕と階級が違ふ」⁸とある義山に対して論じた一言からも、明仲の家庭が少なくとも一応は労働者階級や無産階級の類には属さない意味での資産家であることは十分に推測される。ただし、あくまでも無産階級レベルよりは上であるだけに過ぎず、その実、家庭経済の基板は極めて脆弱で、「小金持」ながら「没落して行く家」⁹とある如く、遅かれ早かれ最終的には無産階級と同じ状況に没落することが想像されるのである。¹⁰そ

⁷張文環「落蕾」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四巻〔張文環〕、東京、緑蔭書房、1999. 7. 20、一版、p. 9。

⁸同注7、p. 10。

⁹同注7、p. 10。

¹⁰以下は関連箇所引用である。「義山君、僕の家は生活は第三者の君から見れば如何にも裕福に見へるだらう。しかしさうぢやないのだ。親爺は毎日一家の経済をどう云ふ風に切り廻はして行くかと、しよつちゆ



の要因たるものが、子供に施した高学歴取得がもたらした家計への負担である。

以下、以上のことを踏まえて、他の作品における主要人物の高学歴取得がもたらした家庭経済の様相を探ってみたい。

「山茶花」の主人公の賢はその作品に於いては地元の村出身の最初の大学生の設定であり、村社会の住民からはインテリとして認められていることが作品に示されているが、このことは当時の台湾地方社会における一般庶民階層がさほど学校教育や高学歴取得には関心を示さなかったこと、そして社会的に知識人としての高学歴取得者が極めて希少な存在であったことを意味している。また、賢が高学歴取得の機会を得た要因となったのが、賢の父が「村で指折の商店主人」¹¹であり、家庭にある程度の経済基盤があったことであり、多少なり資産家としての経済的基盤があったことである。ただし、あくまで規模的には小資産家に等しく、作品には家の商売状況が良好ながらも、賢の学費捻出が負担となり、その家庭は細部における「儉約」が強いられた状況に置かれていることが示されている。¹²こうしたことから、賢の家庭では、「家財を残してやることは、勿論勉強をさせてある以上は、そんな余裕もない。従つて、勉強させるか金を残してやるかの二つに一つを選ばなければならぬわけである」¹³とある如く、その経済的余力が子供の教育費、学費、及び長期間の生活費援助（日本留学を含む）が支えられる程度に留まるに過ぎないことが分かる。このような主人公男性の家庭の様子は「落蕾」明仲の家庭背景と共通しており、後の作品に於いても同様の傾向が見られる。

「落蕾」に続く「父の要求」陳有義の家庭の場合に於いても、家庭環境や経済状況の様子は類似したものである。作品に「こんな邊鄙な田舎にゐても、しかも村全體から言へば阿義の家は決して金持だとは言へないにも拘ら

う頭をひねつてゐるのだ。つまり一家が段々貧乏に……」（「落蕾」、同注7、p.9）

¹¹張文環「山茶花」、『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』東京：緑蔭書房、1999.7.20、一版、p.240。

¹²以下は関連箇所引用である。「感じやすい賢には家の経済状態がよくわかつてゐた。両親は彼を大学まで行かせるのに、精一杯出して儉約してゐることを、たとえば、父の煙草を見てもわかるのだつた。今まで敷島だとか朝日などを吸つてゐたが、今度はキザミをつかつてゐた。」（「山茶花」、同注11、p.240）

¹³張文環「山茶花」、『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』東京：緑蔭書房、1999.7.20、一版、p.242。



ず、中學を出、臺北の高校も出て東京の大學にも入れて貰ったのである」¹⁴とある如く、公学校教育に始まり日本留学を伴う大学卒業に至るまでの金銭的負担の様子が示されており、「落蓄」明仲の家庭経済を連想させるに十分なものとなっている。そして、リスト①の最後に挙げた「土の匂ひ」清輝の家庭の場合に於いても、日本の大学を卒業した清耀の長期にわたる学費と生活費を負担したことで、その父親は「精米工場」株主で「帳簿」を受け持ちながらも、「辛うじて毎日の生活を保つてゐると云ふ状態」¹⁵にあることが内容に記されている。

以上を整理すると、主要人物たる青年知識人の属する家庭は、「頓悟」為徳の家が「精米所」経営、「山茶花」賢の家が山産物を扱う「店」の経営、劉万徳の家が雑貨店「茂昌商店」経営、「地方生活」澤の家が「商店」経営、「土の匂ひ」輝清の家が「精米工場」¹⁶の株主かつ経営であるという具合に、いずれも無産階級には属さず、それでありながら、資産家階級と呼べるほどの裕福な基盤を有していないことが理解できる。ただし、少なくとも庶民階層の者から見れば、これら家庭は資産家たる存在に映り、無産階級とは分け隔てられていた家庭であったと言える。と言うのも、無産階級たる庶民一般の家庭の場合では、子供に対する長期間にわたる高額な学費や留学費用などの捻出は経済的に不可能に近く、そもそも当時の台湾の庶民の間には子供に高等教育を与えようという理解や価値観は持たなかったからである。

以上、主要人物をめぐる家庭の稼業やその経済状態を論じてきた次第である。ここで問題となるのが、そのような主に商店経営を主とする家庭が、如何なる理由で事実上の跡継ぎ息子に等しい人物に対して家庭経済の犠牲を払いながら、彼らに大学までの高学歴取得を命じたか、或いは認可したかである。読者の立場としては、主要人物が封建社会の一員であったことを鑑み、それら青年達の将来に予測されるのは封建的世襲制度に則り、家業である商

¹⁴ 張文環「父の要求」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 46。

¹⁵ 張文環「土の匂ひ」、『臺灣文藝』七月號(一卷第三號)、台北、1944年7月、p. 10。

¹⁶ 「頓悟」為徳の家庭が「精米所」経営、「地方生活」阿山の父が「精米工場」経営、「地に這うもの」林貴明の家が雑貨店を経営しながら「精米所」を営むといった具合に、作者にとっての精米工場経営は資産階級の所有として商店経営と関連性の深いものであったと思われる。



店経営を引き継ぐことが、跡継ぎ息子たる見郡の避けることの出来ない選択であると思われるのだが、それら青年知識人は商店経営や工場経営には必要とされない高学歴取得を願い、しかも多くが立身出世とは無縁である文学専攻となっている。また、たとえ彼らに人道主義的価値観から利害重視の学問専攻を拒むこと、即ち商売人的な生き方への共鳴や、立身出世至上の功利的な学問そのものを拒絶したいという動機や理由などがあつたと仮定しても、経営者であり家長でもある父親が、そのような家系維持の妨げとなり立身出世や金儲けとは無縁とみられる跡継ぎ息子の選択に十分な理解を示すとは考えにくい。即ち作者の描いた青年知識人の登場は、単に主要人物像の個人的な範疇（思想性や人生観など）に於ける「特殊性」だけでは十分な理解ができないのである。

また、張文環作品にはかなりの数にのぼる商店経営の家庭出身の青年像が登場しているが、リスト①に挙げた青年人物を除き、その他は、殆どが学校教育や高学歴取得などには興味を示さず、伝統的な世襲制に則り、父親の商店経営を継承するか、或いは将来的に継承することが予想される人物となっている。以下、その様子を論じたい。

3.2 商店経営の家庭を出身とする台湾人青年の実情

張文環の描いた商店経営の家庭出身の長男や一人息子は主に公学校教育を受けた世代であり、彼らが生きた年代は上述した青年知識人と大差なく、作者は伝統的と分け隔てる意味で、いずれも当時の作者本人と同世代であることを想定した新世代に属する人物として扱っている。ただし、それら人物が受けた学校教育は、リスト①の人物の如く高学歴取得者ではなく、主に最終学歴が当時の義務教育である公学校（小学校）教育の授受者がほとんどを占め、せいぜい中学卒業者が数人いる程度である。

以下のリスト②は、最低でも公学校に於ける学校教育を受けた青年人物を主要人物として挙げたものである。なお、一部条件に満たないと思われる人物に関しては注を参考にさせていただきたい。

リスト②：主に公学校、中学校など教育を最終学歴とする人物に関して



作品（発表年月）

■主要人物（家庭における位置づけ）、作品内容における最終学歴

▲父親像 ●家業

「落蕾」（1933. 7. 15）

■義山（不明）、公学校卒業以上 ▲— ●—

「部落の元老」（1936. 4. 20）

■阿三（一人息子）、公学校中退 ▲榮爺さん

●「萬濤床」経営

「豚のお産」（1937. 3. 6）

■阿圳（一人息子）、公学校卒業 ▲「父親」

●阿圳が父親の「道師」の家業¹⁷を継承

「二人の花嫁」（1938. 10. 1）

■進發（一人息子）、公学校卒業 ▲阿福爺さん

●「協成金銀紙店」経営

「辣蕪の壺」（1940. 4. 1）

■「息子」（一人息子）、最終学歴不明 ▲範爺さん

●「雜貨店」経営

「芸姐の家」（1941. 5. 27）

■「息子」（一人息子）、中学卒業 ▲「主人」

●「日進雜貨店」経営

「芸姐の家」（1941. 5. 27）

■楊秋成（不明）、中学卒業 ▲不明

●楊秋成が「若主人」として「雜貨店」を経営

「闍雞」（1942. 7. 11）

■阿勇（一人息子¹⁸）、公学校卒業 ▲鄭三桂

●かつて鄭三桂が「副全藥房」を経営。後に売却する。

¹⁷「道師」たる職業は店舗を持たない意味で、他の人物の家庭の如き商店経営者とは異なるようであるが、作者はこの人物の家業を「商賣」（「豚のお産」、p. 86）とみなしている。（「豚のお産」は『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』所収）

¹⁸本来は次男であったが兄の「阿成」が死亡したため一人息子の設定となる。（「闍雞」、p. 244）（「闍雞」は『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』所収）



「山茶花」(新聞連載小説、1～111回、1940. 1. 23～1940. 5. 14)

■「息子」(不明)、公学校中退或いは卒業¹⁹

▲不明 ●「雑貨店」経営

「地方生活」(1942. 10. 19)

■阿山(長男)、公学校卒業 ▲楊思定

●過去に「精米工場」経営

「媳婦」(1943. 11. 17)

■阿全(一人息子)、公学校卒業 ▲「父」

●「雑貨店」経営

「土の匂ひ」(1944. 7. 1)

■趙(不明)、公学校卒業 ▲不明

●趙本人が「食糧品店」経営、「福星商會」(「商工會議所」)の「主人」

「地に這うもの」(1977)

■陳久旺(一人息子)、公学校卒業 ▲「父」

●「金源成商店」経営

「地に這うもの」(1977)

■林貴明(長男)、不明 ▲林大頭

●実家では「日新商店」経営。だが、本人は実家の持つもう一つの経営である「精米所」を管理

「地に這うもの」(1977)

■林貴樹(次男²⁰)、不明 ▲林大頭

●「日新商店」経営

以上のリスト②と、前記したリスト①との共通点は、以下の通りである。

- 一、中心人物が学校教育と義務教育を受けた人材であること。
- 二、中心人物が長男や一人息子としての設定であること。
- 三、その家庭がある程度の資産を有する、小、中の資産家であり、商

¹⁹「0庄の一ばん大きな雑貨店」(「山茶花」、同注11、p. 335)の跡取り息子のこと。縁談相手の娟の最終学歴が公学校中退であり、この人物は娟のと「同じ教育程度」(「山茶花」、同注11、p. 339)とされている。

²⁰いちおう「次男」ではあるが、「長男」の健康面に致命的な問題があり、実質上の商店跡取りとなっている。以下は関連箇所引用である。「日新商店長男の林貴明は体が弱そうで、おもに精米所の世話をしている。」(「地に這うもの」、同注22、p. 292)。



店経営がほとんどであること。

続いて、リスト①との違いは以下の通りである。

- 一、主要人物の最終学歴が異なること。
- 二、家父が商店経営や工場経営などに価値観を置く存在（リスト②）と、置かない存在（リスト①）とに分けられ、前者はその経営持続を展望しているが、後者のほうは自分の代を以って経営終焉を覚悟している。

リスト②は封建的世襲制度の現実を踏まえ、比較的客観性や普遍性を備えることから、リスト①に比べて主要人物の登場が多く、また、公学校を最終学歴とする人物が多数を占めている。このことは、前述の如く、商店経営者たる家庭が子供の学校教育や高学歴取得には興味を持たなかったことを意味する。ちなみに、「落蕾」義山は「貧乏」な家庭出身であり、リスト②では唯一、商店や工場の経営とは関係の無い、無産階級に属する人物である。だが「落蕾」物語の途中で日本へ留学に出発した設定となり、その最終学歴は少なくとも明仲と同じく大学就学或いは卒業になると思われるため、リスト②における例外的な人物となっている。また、「地に這うもの」陳武章（陳久旺の次男）の如く師範学校卒業の人物なども例外として扱われ、リスト②では同種の人物の例が見られない。²¹ちなみに、この陳武章は老舗大雑貨店である金源成商店一家の跡取りであり、商店経営の後継者的人物という意味では他の人物と接点があるが、師範学校を出て公学校の訓導となったことは、彼の家庭に十分すぎるほどの経済的基盤があり（この人物の家庭のみ世襲貴族的な大資産家の設定である）、彼を「文官」²²にしたいという「西の保正」という役職を持つ父親である陳久旺の個人的願望が強かったこと、更に商店経営のほうは「女学校」を出た娘に「理想的に近い婿」を見つけ、陳久旺が「老番頭」となって「共同経営」し、「あとは楽隠居で、日本から大陸を股に

²¹実質上の跡取り息子であり、家族からは一人息子の如く扱われる。上には血縁関係のない兄の陳啓敏がいるが、陳啓敏は当初、子宝に恵まれない陳久旺が養子として迎えた人物に過ぎず、陳武章が誕生した後、陳啓敏は家族から冷遇され、跡取り息子としての地位を失う。

²²張文環『地に這うもの』、東京：現代文化社、1975年9月15日一版、p. 109。



かけて、夫婦二人で旅行する」²³といった展望があったからに過ぎない。以上のリスト②に挙げた他の全ての関連人物を見ても、このように高学歴を授けられ知識人となったケースは極めて特殊である。実際には、老舗雑貨店として金源成商店と肩を並べる店舗を経営する「東保の保正」²⁴を任ずる店主の持論こそが、多くの商店経営者の子孫に対する学問授与や学校教育の本音であったと言える。この作品に於いて「東保の保正はそれとちがって、山の産物と日常雑貨の商売に固定してひっそりと暮らしていた。息子は二人もいるが長男は頭がいいうえに人々のうけもよい。しかし読書人にしむけることは保正にとっては、あまり喜ばしいことではなかった。(中略)娘二人とも美人で、公学校へやるのが心細いから国民教育をうけさせず、もっぱら家事の手伝いをさせていた。」²⁵とある如く、商店経営の家庭にとって息子をして学校教育を受けさせることは必ずしも有用性や将来性のあることではなかった。作者の最も多く描いた商店が「山の産物」、「日常雑貨」を扱う、部落や田舎町にある雑貨店である。以下は「山茶花」に描かれた「栄利商店」を例に同類の商店営業の様相が示された箇所引用である。

栄利商店のやうな、田舎店は、都会の店とは違つて、謂はゞブローカみたいである。山の産物と都会の日常品を交換させる役割を取りもつてゐる店である。従つて山産物で儲けようとするならば、思ひ切つて山の百姓をだましてやればよい。それでR K庄の店は大抵それで一代のうちに大きな財産を拵へてしまふから、自分は子供達に勉強させるよりも、いくら上の学校に行つた所で、これよりぼろい儲けがある筈がないと思つてゐるやうであつた。²⁶

この種の雑貨店は主に台湾地方社会にある部落や田舎町などで農民などの百姓を相手にする所であり、作者の作品に多く登場する雑貨店に共通した

²³同注 22、p. 109。

²⁴同注 22、p. 11。

²⁵同注 22、p. 118。

²⁶同注 22、p. 165。



特徴を表しており、往々に作者の批判対象として扱われている。²⁷とりわけ商店経営者が学校教育をして無意味なものとなす所以が詳しく説明された作品が「頓悟」である。以下は主人公為徳の勤める呉服店店主の教育に対する見解が示された箇所の引用である。

學問と云ふのはやはり社會の地位を得るための學問でせう。それならば、為徳君、金を儲けることではないか、だから君はこれから一生懸命に商賣を習はなければならないのだ。(中略)金さへ儲ければ自然に紳士になるし、紳士は即ち文化運動を牛耳るのだよ。だから一生懸命に金儲けの工夫をして居ればいいのだ。私は中學しか出ないが、しかし必要があれば、大學出のものを雇って仕事をしてもらふことが出来ます。地獄の沙汰も金次第、と云ふ言葉を知つてるでせう。これが商業精神です。²⁸

ここでは主に商店経営者などが学校教育を否定する所以と、「商賣」と「金儲けの工夫」の専念を第一義とする商人の見解が示されている。この種の価値観は近代化と資本主義化の影響を強く受けたものでもあり、謂わば、商人に限らず、俗世間的一般に蔓延した教育観であるとも言える。当時の一般庶民は往々に「何事も唯物的に解釋しようとしすぎる」²⁹という考え方を持つもので、少なからず商店経営主の拝金主義的な価値観に共通する。即ち、「要するに現代教育の缺陷は人格を陶冶するのではなく、立身出世をめざして

²⁷例えば、「頓悟」、「夜猿」には作者の雑貨店経営に対する批判として以下のように記述されている。「いろいろ町へ行つてゐる人の話によると、日昌商店から三四千圓も借りてゐるため、こゝの生産品の相場はみなその商店で勝手に値段をつけて賣つてゐる、石はその相場のつけ方が余りにひどいため、萬頂叔父さんの所へ相談に行つたが、生憎叔父さんが病氣でふせてゐた。(中略)民坊はその母の姿をお猿さんが子供を抱えて逃げるのと同じように、町の商人が憎らしくてならなかつた。」「夜猿」、p. 217。「私は自分が貧乏人の息子であるから貧乏人の買ひものの心理がよくわかる。であればこそ安く賣つてやりたい。しかし現在の商賣機構はあべこべに貧乏人が高いものを買はなければならない形である。」「頓悟」、同注 28、p. 233) 作者が商店経営者に見出した「現在の商賣機構」とは、かつての客の立場を考え廉価で売るやりかたとは異なり、非人道的な方法で利害を貪らんとするものであったことが分かる。」「夜猿」は『日本統治期台湾文学集成 2 台湾長編小説集 2』所収)

²⁸張文環「頓悟」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 221。

²⁹同注 15、p. 4。



る暗記の試験に過ぎない」³⁰という様子が当時の教育や学歴における客観的な現状を示しているのである。例えば「土の匂い」清輝が日本留学から帰郷後、親戚一同が祝福に訪れる場面があり、そこでは彼が文学専攻だと知らない俗世間一般の庶民的な学問に関する価値観が批判的に示されている。以下は関連箇所の引用である。

見舞にきた親類たちも、清輝が東京から何かえらい鑑札を持つてかへつてきた様な口のきき方だった。それに対して清輝はかへつてユーモアを感じずにはゐられなかつた。田舎の人達にとっては、醫者の鑑札かもしくは何かの鑑札をもらふ他に、いいことがあるとは思へなかつたのである。³¹

作者の描いた青年知識人は、特に俗世間の庶民が持ちがちな「金持」になりたいという打算、他の知識人が求める立身出世願望を強く否定する性格を持つ。その大きな要因となるのが、一つが長年間生活してきた商店経営という家庭環境そのものであり、彼らが金儲けを当然の価値観とする商人的な生き方の本質を理解していたことである。そして、もう一つが「地方生活」澤の如く「孔子と現代の新奇な学問とはどこが違ふか」³²という現代教育の問題点を熟慮したことで、現代教育が少なからず資本主義の持つ唯物論的な価値観に偏っていたことに問題意識を懐いたことである。

留意すべきは、商人たる人物が往々に学校教育を否定する傾向を濃厚にすること、そして作者の描いた青年知識人像の家庭の多くも商店経営であることである。即ち、それら人物の父親であり店主たる人物の思想性は、一般の商人のとは異なった存在であると仮定されるのである。換言すれば、作者の描いた青年知識人の多くが商店経営の家の出であり、それも長男や一人息子としての登場ながら、学校教育と高学歴取得を実現したことに於いては、

³⁰同注 15、p. 5。

³¹同注 15、p. 7。

³²張文環「地方生活」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 292。



その家庭の家長である父親が息子をして、商店経営継承させようとする展望が無かったことを意味する。また、高学歴取得の知識人青年の如き人物の出現には、長期にわたる学費や生活費、留学費用などの援助が不可欠であること、そして前述の如く家の資産的蓄えの一切をその援助に充てるだけの覚悟も必要とされ、それら家長が自分の跡取り息子に教育機会を与えるという決断には彼らなりの考えがあったものと思われる。

4. 知識人青年の父親に関して

ここでは息子に対し長期間の学費や生活費の援助を続けた家長たる父親像の分析を行いたい。以下では、商店経営や精米所などの経営者としての立場と、子供に大学留学をさせた共通した特長を有する「山茶花」、「地方生活」、「土の匂ひ」三作品の父親像（楊徳義、王主定、「父」）に論点を絞り、順次論じていきたい。

「山茶花」の場合、主人公賢が公学校から日本の大学留学までの学校教育を受けられた主因が、その父親である楊徳義が商人にそぐわない性格の人物であったからであることは、以下の関連箇所引用からも理解できよう。

賢の父が、山の部落から、R K庄に出て、店を開いたのもこの商人のずるさを発見したからである。だから最初のうちはR K庄の同業者には随分敵視されたけれども、山の百姓の維持があつたのでそんな視線にはびくともしなかつた。山の人の為には彼は百姓に山産物の時価の高低を教へたと云つてもいゝのである。賢の父はR K庄の商人と違つて短気である。その短気な取引が、茂昌の主人の気に入つたのである。また田舎商人には似合はない大まかな所があるので、水深はいつも楊徳義を傑物だなどと云つたこともある。³³

³³同注 11、p. 165。



引用を見た限り、この楊徳義は豪放で狭義心に富んだ性格であり、商人的存在と対峙する人物として設定され、少なからず作者の商人批判の手段として、また作者の主義主張を旨とした造形が施されている。そして、楊徳義が論じた「金なんぞ持つてゐたら、わしは子供を留学に出すよ」³⁴の一言には、彼が知識人としての生き方にある程度の価値観を有していることが明瞭であり、一人息子の賢の文学専攻に対しても「どうも商売を嫌ふらしいからわしは、彼の趣味にまかしたよ」³⁵といったように、賢の生き方に理解を示しているのである。

続く「地方生活」の場合、主人公澤の父である王主定は台湾地方社会で商店を維持しながらも、その生き方に価値観が見出せない人物となっている。以下は作品からの引用である。

商賣と云ふのは根がない。農業には土地があり、植えたものは凡て芽が生えてくれる。これはもとを云へば主定の思想ではあるが、(中略) 俗界で人といがみあつて、暮らしを立てるよりも、自然を相手にして暮らしの方が樂だ。土地は人を裏切らない。また裏切られても諦めがつき安い。これが主定の持論である。³⁶

「山茶花」楊徳義が大胆で狭義心の強い性格であるのに対し、「地方生活」王主定は安心立命型の伝統的知識人を髣髴させる性格の持ち主だと言える。王主定の商人としての生き方に対する拒絶は、楊徳義の如く自分自身を商人の一人として認め、当時の商人を悪しき存在としてそれに対する攻撃を露にしたものとは異なり、商人の立場から距離をおいた上で道家思想の如き自然回帰による心の安定や平穩といったところに重点が置かれたものとなっている。また、資本主義化や近代化が推進される現実や、農民などの無産階級者の無教養な様を配慮し、同時に伝統的な儒教道德の有用性を認識しているの

³⁴同注 11、p. 166。

³⁵同注 11、p. 167。

³⁶同注 32、p. 280。



もその人物の思想的特徴の一つである。こうしたことから王主定には伝統的な知識人としての造詣が見られ、「四書五經」³⁷精通し、儒教的教育を重視する立場より「勿論無學な國民を養ふのは愚の骨頂である」、「強い國民と云ふのは文武兼備と云ふ所にある。文が分からなければ、體が強くても、氣違ひに刀を持たせると同じ」³⁸といった、本人の発言が示されているのも、主に彼が知識人的としての考えや氣質などを示すことに主旨があったからである。そして学問の機会が得られない「無学」な庶民に対しても、「たとへ百姓をしてゐても、論語だけは覚えさせたい」³⁹という願望を有しており、それら庶民を導くべく息子の澤に対しては「うんと勉強して、この人達に新しい學問を示さなければならぬ」⁴⁰という期待を持っている。この人物が世俗的な庶民でないことは明らかである。

そして、「土の匂ひ」の場合、主人公清輝の父親（「父」）の場合、主に「地方生活」の王主定の造詣を継承した人物造詣が施されていると言える。物語に於ける「父」に関する箇所は以下の引用に於ける記述が作品における全てであるが、人物像を理解するには十分である。

女學校三年生の時、家事上のことで中途退學しなくてはならなかつた。姉は性格的にややもするとひがみがちであつたが。だが家事の手傳ひをする傍ら、毎夜、父から四書五經ををしへてもらつたりした故か、姉はすっかり家庭的な娘になつて、ひがみ所か、父の帳簿を手傳ふ事に興味をおぼへ、かへつて朗らかになつたやうねあつた。いはゆる古い型の美人で帳簿は父親より慥かに上手だ。その上、國文も漢文も達者で、(以下省略)⁴¹

³⁷同注 32、p. 285。

³⁸同注 32、p. 280。

³⁹同注 32、p. 280。

⁴⁰同注 32、p. 280。

⁴¹同注 15、p. 12。



ここでいう「古い型の美人」とは、張文環作品における伝統的女性の理想像である古典的女性（優れた気品と高度な知性や教養を兼ね備えた娘のこと）を意味しており、その長女の人格形成や教養面に大きな影響力を及ぼした要因が「父」による家庭教育であるとされており、この「父」たる人物の有する非商人的な思想性の様子が伺えるのである。

以上の如く、作者の描いた青年知識人の登場に関しては、青年知識人が当時の立身出世願望や、功利的、打算的な価値観を有する知識人一般とは異なり、特殊な人物であることと同様に、その父親像においても一般の俗世間における商人とは異なった特殊な存在であることが理解できる。そして、それら張文環の文学愛好の青年知識人の登場には、これら父親像の存在が大きな意味を有しており、単に青年知識人像の高学歴取得における経済面での援助に限らず、その人道的価値観を重視する思想面、伝統的な道德心の涵養、高尚な人格形成においても大きな影響力を及ぼす存在となっているのである。

5. 商店経営者家庭における台湾人青年の命運

5.1 青年知識人と商店跡継ぎをめぐる対比

作者が主に商店経営の家庭をめぐる人物設定には、近代的な資本主義的価値観がもたらす人間性の腐敗、伝統的道德観の衰退、封建的世襲制度の問題など様々な社会批判が含まれている。「山茶花」には、商店経営が「ぼろい儲け」、「大きな財産を拵（え）」をもたらすことで、わざわざ学校で「子供達に勉強させる」⁴²ことを無意味とする商人の価値観が批判的に示されているが、作者のその人間批判は商店経営の家庭の衰退、滅亡の様相にまで及ぶ。

しかしその子供の時代になると、庄よりも都会の方が美しく、そして女などはあかぬけて、一目みただけでも自分の脳裡には一大文化的な飛躍をかんじざるを得ないのである。金持とは云ふけれども、三代逆のぼれ

⁴²同注 11、p. 165。



ば百姓と云ふ言葉はこゝでは通じないのである。せいぜい一代や二代で店が衰へてしまふのが普通である。⁴³

これは「山茶花」における賢の父親楊徳義を通じて示された作者自身の見解である。実際、リスト②に挙げた主要人物、即ち父親の商店経営を継承するか、継承すると予想される主要人物の多くは長男や一人息子の設定となり、どれもが道德観や勤勉性、生活力などを欠如から家庭経済の衰退や破滅をもたらす人物となっている。また、小学校か中学校の教育程度を有するのみで、他に生活の手段を持たない彼らには店の後継者としての道しか選択肢がない。だが、それら家庭が小、中の資産家であり、ある程度の生活の保証や世襲制の恩恵があることで、勤勉さや勤労さの欠如を招き、人間性の墮落を促す結果へと繋がり、最後は中国語で言う「敗家子」たる人物となるのが殆どである。

この種類の人物の登場は既に処女作「落蕾」に見られ、地方社会における雑貨店の跡継ぎ息子の設定となる。また、この「落蕾」は青年知識人（高学歴を取得中の明仲を指す）を描いた最初の作品でもある。作品には無産階級たる「貧乏」⁴⁴家庭出身の青年義山が登場し、大学留学中である明仲と同じく高学歴取得を志した人物として描かれている。ただし、明仲の如く資産階級出身ではなく、家に学費援助の余力のない無産階級であるため、生活費や学費を自力で捻出しなければならない設定である。日本留学の先輩たる明仲が義山に与えた忠告は、「本当に生活の切羽詰りに繰り返し何遍も直面する事が、ほんたうの人生を凝視める最高の教訓だ」⁴⁵とある如く、資産階級と無産階級の区別なく、自身が社会で生き抜けるだけの生活力を得ることの重要性であるとあるが、それは明仲が将来的な実家の没落と無産階級となることを認知していたからである。ここで明仲と対立する人物として設けられた人物が同じ年代の青年「大雑貨店のK」である。この人物は、物語では実家

⁴³同注 11、p. 165。

⁴⁴同注 7、p. 29。

⁴⁵同注 7、p. 10。



が「金持ち」⁴⁶側の人物となり、財産と地位を以って義山の恋人秀英を奪った（秀英の家庭は借金を抱え、「大雑貨店のK」との婚約を承諾せざるを得なかった）人物であり、本作品では「勉強嫌い」という反面性のみが示され、青年知識人である明仲とは対比され、かつ対立した関係となっている。即ち「落蕾」は作者の処女作でありながら、同じ資産家出身の異なった二種類の青年が登場し、いっぽうが知識人、もういっぽうが商店後継者といった違った人生を歩む人物設定が為された最初の作品なのである。そしてこの作品を皮切りに後の作者の小説には、知識人たる明仲と商店経営者たる「大雑貨店のK」をめぐる二種類の青年人物が繰り返し登場する。説明するまでもなく、明仲の延長にあたる人物がリスト①の多くであり、「大雑貨店のK」の延長がリスト②における人物の大半である。

5.2 二種類の青年像をめぐる将来的展望

リスト①に示された青年知識人が主に商人の家庭出身であることは前述したが、それら人物が知識人としての将来を選んだ動機には、リスト②にあるような出生や成長の環境（商人の家庭出身でありかつ一人息子や長男としての身分である）を同じくする人物が封建制度の世襲制度に従い、稼業たる商売を引き継いだように、自分自身も同じ運命を受け入れるべく状況が予想されたからであったと思われる。即ち、作者の描いた青年知識人が高学歴取得を目論んだ動機たるものは、俗世間がみなす立身出世や地位や名声の確立よりも、何より非人道的で拝金主義的になりがちな商人的な人生からの脱却を第一義とする欲求であったと仮定されるのである。

リスト②に属する主要人物は、ほとんどが商店経営の後継者としての人生を歩んだ（或いは歩むと予想される）人物に属し、結果として彼らを待つのは「山茶花」賢の父親が示した「子供の時代になると……店が衰へてしま

⁴⁶以下は唯一この「大雑貨店K」に対する形容が示された箇所を引用したものであり、ヒロイン秀吉が借金を抱えた家庭事情により「大雑貨店の息子K」との縁談を両親から強要された際に発した一言である。「あの大雑貨店の息子Kときたら、かへつて妾の方が上だわ。勉強のきらいなKと、……ああア……妾どうしたら好いでせう。」（「落蕾」、同注7、p.17）



ふ」⁴⁷という暗澹たる末路である。リスト②の人選における「部落の元老」阿三、「豚のお産」阿圳、「媳婦」阿全など⁴⁸、これら人物は一律、公学校卒業（「部落の元老」阿三は中退）の人物であるが、年齢的に比較的若く、公学校就学後から大した歳月が経過していない段階の人物で、作者により不勉強、無能、愚鈍という側面のみが強調された人物となっている。また、社会人として成人し、既に後継者（店主や若旦那など）となった「辣蕪の壺」の「息子」、「豚のお産」阿圳、「二人の花嫁」進發、「芸姐の家」楊秋成、「地に這うもの」陳久旺などの場合では⁴⁹、家に経済的余裕があることで、仕事における怠慢、女性に対する好色さ、親への道德心の欠如などが露となり、家を潰す意味での放蕩息子、すなわち「敗家子」として造詣され、張文環小説における典型的な墮落型の人物となっている。なお、これら商店経営の後継者或

⁴⁷同注 11、p. 165。

⁴⁸「部落の元老」阿三は「低脳」（「部落の元老」、p. 9）な側面のみが描かれた人物であり、公学校では「二年間ぶつづけて落第した」（p. 11）こともあり、父親も「たかが自分の店の収入の読み書きを覚えるぐらゐなら、學校へ行かなくとも店の手傳ひして居れば澤山だ」（p. 11）と考え、彼を中途退学させる。「豚のお産」阿圳は「道師の父親の跡繼」（「豚のお産」、p. 84）であり、父親が他界していることで、公学校卒業後間もない年頃でありながら浮ついた気持ちで家業を継いだ人物である。だが、彼は母親が「莫迦」（p. 86）と認める能無しで、物語では仕事先で醜態を晒すという有様が描かれている。「媳婦」阿全は店の「手金庫から小遣金をちょろまかし（て）」（「媳婦」、p. 321）、「料理屋に這入り、台北からきたその女にいちやついている」（p. 322）人物であり、挙句、家の金を持ち出し台北へ遊びに出たまま帰らず、金を使い果たすと「送金を依頼する手紙」（p. 329）を送る放蕩息子である。（引用文献である「部落の元老」は参考文献を参考されたい。それ以外の引用は『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕からのものである）

⁴⁹「辣蕪の壺」の「息子」は所帯を持ち店を継いだ後も母親「婆さん」に店の経営を握られたままである。その理由が「やつぱり一家の總取締りは婆さんがやつてゐるやうであつた。息子はひ弱で、母よりも父親に似てるのだつた。」（「辣蕪の壺」、p. 100）とあるように、彼が商店経営を一人で担うにはあまりにも未熟或いは無能であったからである。「二人の花嫁」進發は公学校卒業後、商店経営を継いだもの、「金銀紙を束ねる女工にいちやつく」（「二人の花嫁」、p. 91）有様で、それを危惧した父親は適当な嫁を宛がい結婚させたが、それもつかの間、「進發」の浮ついた態度は相変わらずであり、「外出着を着て仕事をし」、「髪もてかてかにポマードをぬつて」（p. 93）きれいに着飾った新妻と一緒に店中に「戀の空氣をかもし出（す）」（p. 93）といった如くである。「芸姐の家」楊秋成と「地に這うもの」陳久旺はともに雑貨店の若旦那としての設定で、両者とも「料亭」（高級料亭兼水商売の店のこと）に通い、その芸者「芸姐」を相手に女遊びや浮気をする人物となっている。「芸姐の家」楊秋成のほうは登場場面が限られながらも、その芸者たる女性と結婚を決意した人物となっている。そして、「地に這うもの」陳久旺は、老舗雑貨店の「若旦那」でありながら、料亭の芸者に入れ込み金を貢ぎ（これを知った父親が「氣死」に追いやられる）、かつ子守娘として雇った十五歳になる娘と姦通する人物となっている。なお、同作品には、「しかし陳家はつぶれなかった。それは老番頭がしっかりしているうゑに、若主人よりもいっそう頭のよい若奥さんがひかえているからだ」と噂された」（「地に這うもの」、同注 21、p. 87）という記載がある。（引用文献である「地に這うもの」は参考文献に示した。それ以外の引用は『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕からのものである）



いは後継者となった青年像の墮落した姿には、人格陶冶を怠り実利重視を重視した商人の因果応報、即ち血縁関係を通じた消滅の様相が示されている。

いっぽう、商店経営者としての生き方を否定したリスト①の青年知識人は主に商店経営の家庭に生まれながらも、リスト②の人物とは別の道を歩むかたちとなる。リスト①の人物像は「社会の地位を得るための学問」という商人の持つ価値観への否定と反動もあり、世俗的、功利主義的な考えを排他し、己の人格陶冶と人道主義的な生き方を貫く傾向を有する。日本留学に出発した「山茶花」賢が田舎での生き方に賛同したこと、そして大学卒業生たる「父の要求」阿義、「地方生活」澤、「土の匂ひ」輝清などが、本来的に知識人が活躍すべき場である近代化の整った「都会」よりも封建伝統が残された「田舎」を生活基盤に選んだのも、己の性格や思想性の中に近代化や資本主義化を否定する要素を多分に孕んでいたこと、そして「田舎」が人道的価値観の比較的尊重される適所適材の場であったからに他ならない。即ち、人物像の倫理道徳や人道主義的な生き方が受け入れられる伝統的社会こそが彼らに相応しい生活基盤確立の場であったと言えるのである。

以上、主に商店経営たる出身家庭を持つ二種類の青年人物に関して論じたが、そこには地方社会に於ける資本家階級の家系存続問題が示されているのが明らかである。即ち、商店跡継ぎとなった青年は親の資産と世襲制度に守られながらも墮落し破滅したのに対し、商人たる生き方を拒み知識人の道を選んだ青年は最終的には一個人の力で生存を確保した人物となっているのである。⁵⁰

6. 結論

張文環小説における青年知識人の登場には、その出身である商店経営の家庭が大きく関わっていること、この要素がそれら人物をして俗世間一般の知識人とは異なった人物像にさせたというのが今回の論文の結論である。こ

⁵⁰詳細に関しては筆者の「張文環小説におけるインテリ人物の特殊性」を参考にいただきたい。



ここで言うところの俗世間一般の知識人とは主に医学や法学を専攻し、将来的な立身出世を目論む人物を指す。

張文環小説に於いて主に主人公として登場の青年知識人の場合、その高学歴取得後の人生の目的に定めるものは一般の青年知識人が求める立身出世や地位の確保ではない。彼らの高学歴取得に願うのは、基本的には商人たる生き方からの離脱にあったこと、そして商人の跡継ぎとなり人間性の墮落に陥った多くの青年達と運命を共にせず、個人の力で生き抜くことにあった。

なお、作者が自分の小説作品で多くの青年知識人をして商店経営などの資産家家庭の出身に設定したことには更なる理由がある。それは、商店経営を営む家庭における世襲的な家系存続の問題であり、そこには世襲制度の恩恵を受けて、結果的に人間性の墮落がもたらされた商店後継者の姿があったことが大きな要点となる。即ち、作者がそれら青年像をして商店経営の家庭などの長男、一人息子の設定にしたのも、世襲制度に甘んじる資産家階級の存続と破滅のありかたの提示を意図していたからであると思われるのである。その際、作者が考えるところの家系存続の鍵となるものが、次世代たる青年人物の自立心と生活力の有無であり、例えば「落蕾」明仲が論じた「本當に生活の切羽詰りに繰返し何遍も直面」すること、「真に生きていく力」の涵養を有しているか否かであった。作者が多く扱った青年知識人は、一般社会が見なす青年知識人像とはかけ離れた人物であり、同時に商店経営者の後継者たる印象が強いものであるのは以上のことが理由となる。最後に、作者が雑貨店経営の実家を有することに関連し、そこから得られた見聞や感受性、並びに作者本人の生活体験や境遇を題材としていることが十分に考えられるのであるが、残念なことに作者は自身の家庭背景などへの記述は残していない。



参考文献

テキスト

- 張文環。中島利郎編。『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』。1版。東京：緑蔭書房。1999年7月20日。
- 張文環。中島利郎編。『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』。1版東京：緑蔭書房。2002年8月31日。
- 張文環。「部落の元老」、『臺灣文藝』第三卷第四・五合併号。1936年4月。台中：臺灣文學奉公會。⁵¹ p. 2～17。
- 張文環。『地に這うもの』。1版。東京：現代文化社。1975年9月15日。
- 張文環。「土の匂ひ」。『臺灣文藝』第一卷第三号。1944年7月。台中：臺灣文學奉公會。⁵² p. 1～46。
- 張文環。『張文環全集』全8巻。陳萬益主編。台中県立文化中心出版。2012年3月。

研究著書、論文など

- 北見吉弘。「張文環小説におけるインテリ人物の特殊性」。『育達人文社会学報』第八期。2012年7月。p. 157～180。
- 中島利雄。「張文環作品解説」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』。1版。東京：緑蔭書房。1999年7月20日。p. 335～345。
- 柳書琴・陳萬益・中島利郎編「張文環著作年譜」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷〔張文環〕』。東京：緑蔭書房、1999年7月20日。p. 347～359。
- 柳書琴（中島利郎訳）。「張文環『山茶花』解説—部落から東京へ、進退窮まった植民地の青年たち」。『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』。東京：緑蔭書房。2002年8月31日。p. 355～388。
- 陳英仕。「張文環『山茶花』析論」。『臺灣文獻』179。2012年3月。p. 155～196。
- 張文薰。「由『現代』觀想『故郷』—張文環〈山茶花〉作為文本的可能」。『台灣文學研究學報』第二期。2006年。p. 5～28。
- 張文薰。『植民地プロレタリア青年の文芸再生：張文環を中心とした「フォルモサ」世代の台湾文学』（東京大学大学院人文社会系研究科中国語中国文学専攻 修士論文）。2005年。

⁵¹底本：『新文學雜誌叢書 33』（台湾：東方文化書局）所収の復刻本。

⁵² 同注 61。



張文薰（中島利郎訳）。「立身出世を求める青年たち—『風俗小説』張文環新論—」。『日本台湾学会報』第4号。2002年7月。p. 56～80。
野間信幸。「張文環の文学活動とその特徴」。『関西大学 中国文学会紀要』第13号。1992. 04. 03。p. 164～184。

